

C-74 僧服に関する研究(第六報)—平安時代の法衣の裁縫について—
大阪女子短大 弓削公子

[目的] 平安時代の法衣の製作の方法を究明し、奈良時代との類似性を明確にし、法衣の形状の推移の論究を試みることにする。

[方法] 平安時代のものといわれる滋賀県の延暦寺国宝の伝教大師所用の刺納衣、及び京都市の教王護国寺の袈の実態調査をし、その裁断方法、縫製方法に合けて、奈良時代の遺品を蔵めている正倉院の御物の中の遺品3領と、六世紀の初めに発掘されたという人物埴輪2点にみる衣服の復原裁断図を用いて比較してみた。

[結果] 日本の仏教僧侶の服装が中国における姿と同様であったことは、帰化人連か僧として伝道した故に当然であり、その師の姿にならったのは必然である。

裁断面では、特に腋下のくり方において、三時代の共通性を見い出すことができ、寒帯衣服の一特色を如実に表わしている。縫製面は脇より付、裾巾、袖のつけ方、裾のひだりなどの方角においても同じことはいえる。これらの衣服の裁縫形式は北アジアの騎馬民族の服装、いわゆる胡服の型式と類型的なもので、宗教一致の観点から、俗服のまま僧となり得ることであり、インド様式の法衣を俗服の上にまとうことを是なりとする理念を打ち出している点と、北方地区の気候の関係から、自然俗服許容の線か生れてくるのである。これら、法衣ひいては日本の一般服飾の底流として、後の世代まで潜在的な影響を残しているのである。